

火曜会通信

2009(H21)・2・01 発行

伊丹市千僧 1-1 伊丹市教育委員会事務局内

新年を向かえて

会長 池田利男

新年明けまして御目出度う御座居ます。

2009 年元旦の初日の出を拝む事が出来まして、誠に喜ばしい事と存じます。

苦境の内で新年を向かえましたが、現役を卒業した我々世代にも苦難の道が始まるかも知れません。

『元日は冥土の旅の一里塚、目出度くも有り、目出度くも無し、』一休禪師、一休禪師のような悟りの境地にはなれませんが、無理をせず、会員の皆様方と御一緒に一歩ずつ前進して行きたいと思います。

～教育委員会事務局 石堂副参事から年頭のご挨拶を戴きましたので以下にご披露します～

伊丹市教育委員会事務局 生涯学習部 副参事 石堂 行文

新年明けましておめでとうございます。

昨年は、皆様方の長年の文化財ボランティア活動に対し、兵庫県より「くすのき賞」を受賞されましたこと、社会教育課としましても、誇りに思っております。

今年は、「歴史・文化が醸し出す伊丹ロマン事業」も三年目となります。更なる飛躍した事業に育てられることを願っておりますので、ご協力をよろしくお願い致します。

「伊丹の古代寺院と地域史へのいざない」実施総括と

菱田哲郎先生講演会「古代寺院と地域社会」概要

中川 康

平成 20 年度の市民活動タイアップ事業は、「伊丹の古代寺院と地域史へのいざない」と題して、巨木の会とタイアップして実施された。伊丹廃寺発見 50 周年の記念すべき年であることを考慮して、伊丹廃寺と北村地域史に焦点を当て、古代寺院建立の背景と地域住民の生活に思いをめぐらし、古代における巨木の存在意義を市民とともに共有するために、菱田哲郎先生を招き「古代寺院と地域社会」の講演会を開催し、さらにそれを受けて、古代寺院（伊丹廃寺）、中世寺院（北村廃寺）の建立背景と緑道の自然林の重要性を知ってもらうために北村界隈を散策することを企画、実施したものである。

北村界隈散策に先んじて開催された菱田哲郎先生の講演会は、極めて示唆に富んだ、すぐれた内容であった。伊丹廃寺の性格が同時代に建立された西摂の寺院のそれとどのように違うのか（古代寺院の伽藍配置や古代瓦から推定して、猪名寺廃寺の建立は伊丹廃寺のそれより早く、また猪名寺廃寺は定額寺であり、伊丹廃寺は定額寺でない。芦屋廃寺、猪名寺廃寺、金心寺廃寺の本尊が薬師仏であったと考えられることから、伊丹廃寺の金堂のそれも薬師仏であったと考えられる）、また伊丹廃寺の塔はどうであったか（法起寺の三重塔の例から考えて三重塔であったと考えられる）、古代寺院の建立の原動力は何か（王朝の仏教保護、豪族、知識結の協力による建立）などと講演された。

アンケート（聴講者 99 名のうち、65 名分）を見ても、多くの聴講者は講演内容を分ったといい（62/65）、伊丹廃寺および西摂の古代寺院の建立意義やその歴史を理解してくれたと考える。

講演会開催後一ヶ月ほどしてから、北村界隈を散策してもらい、参加市民の方々に、緑道の自然林の重要性、古代から中世における北村の重要性（交通の要衝）、教善寺と伊丹廃寺（霊蓮寺）との意義ある関係（教善寺の本尊阿弥陀如来立像が霊蓮寺から移って来たという）、そして伊丹廃寺址ではこの史跡の重要性を認識していただいた。反省すべきは北村地域に住む方の参加が少なく、この事業が北村界隈の町づくりの一助にならなかったことである。

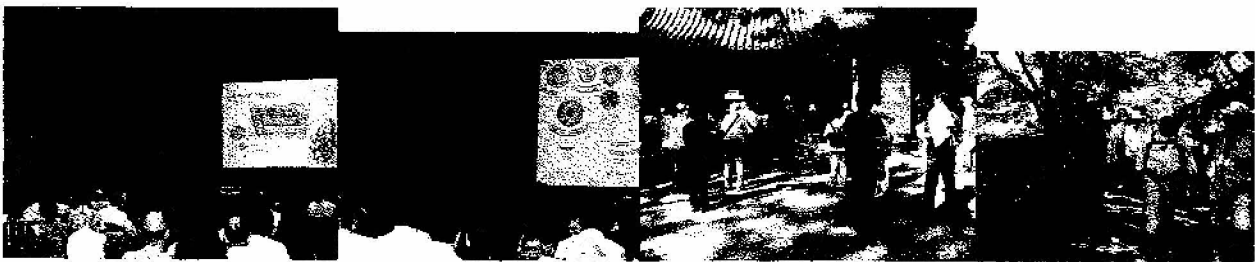
親子を対象とした考古学的体験学習は児童の参加者が 4 名と極めて少なく不十分な結果となった（参加予定の児童 4 名も参加されず残念な結果となった）。勾玉造り、古代寺院の丸瓦の文様造り、そして葉つくりなど、説明資料も作られていて、よく準備された面白い行事であったと思っている。子供を中心にしたイベントでは、IP0 が大きな位置を占める。時 time は夏休みか春休みで、場所 place は阪急伊丹駅、JR 伊丹駅近くが望ましい。学校行事が少ない、親が子供を任せられる時を見極めることの occasion も重要である。考古学的体験学習を実施するに当たっては、市教育委員会や先生方、関係諸方面との協力をあおぐ必要がある。

三年にわたって市民活動タイアップ事業を実施した。一年目は、鴻池界隈の自然と歴史を巡り、伊丹の町を支えた酒造業の重要性を認識し、二年目は、御願塚、南野を散策して、御願塚古墳の築造・青景および了福寺の行基仏（同木異体、霊木化現仏）を拝観してその意義を知り、三年目は伊丹廃寺発見50周年を期して、かつて伊丹の中心地だったと考えられる北村地区の伊丹段丘の自然林と文化財を市民に紹介した。これらの事業を実施することにより、伊丹の誇る古代から江戸時代までの歴史、文化財を市民に紹介したことになる。

町づくり課支援による「市民活動タイアップ事業」は、市内で活躍する各グループに事業化の企画を考えさせ、また各グループの活動、組織化を見直させる点で極めて有意義な事業であると高く評価する。当会も三年間実施してきた経験、実績を生かして、市民活動タイアップ事業に近い行事を実施していくことが必要である。このような行事を地道に実施することで、町づくり課の期待に応えとともに、市民の当会への期待、付託にも応えることになる。アンケート（65名分）で、「今後どのような講演を望まれますか」の問いに、多くの方が行基と毘陽寺（23人）、有岡城と荒木村重（20人）を挙げている。今年度は、毘陽寺や毘陽寺の文化財を守る会の方々と協力して、「行基に関するシンポジウム」を企画しても面白いかと思う。

最後に、伊丹廃寺も北村廃寺もボツンと現在とかけ離れて存在している訳ではないのである。伊丹廃寺は霊蓮寺のような後継の寺院があったらうし、その心は、人々、村々に残っている（例えば、教善寺の本尊阿弥陀如来立像）。北村廃寺は発掘瓦からして東密系の寺院であろうということから、伊丹においても密教寺院の建立そして神仏習合は進んでいたであらうし、神仏習合は現在でも人々の生活に大きく影響している。

隠れた伊丹の歴史を伊丹市民によくよく知ってもらうためには、人目につく箇所に案内パネルを常時設置することやどんぐり座の紙芝居などで市民を啓蒙してゆくような不断の努力が要求される。



城郭構造の上で注目される惣構であるが、どのような経緯で形成されたものであろうか、その要因の一つが「寺内町」である。寺内町は御坊や寺院などを中心としてその周囲に宗主の一族や有力家臣の屋敷を配し、境内に職人や商人の住む町屋などを取り込んだものを指す。

更に寺内町の特徴を肉付けすると『本願寺が獲得した寺内特権に準じて、真宗寺院を中心に形成された宗教的集落である。本願寺が領主に要求した特権、すなわち寺院の安全保障、諸役免除、徳政免除などの“寺内特権”によって、外部の一応独立した地域空間を確立していったのである。寺内町の多くは河川や港に近接して形成され、川や海で生活する人々、手工業職人・商人運輸流通業者・芸能民などの領主支配や旧仏教寺院の支配を受けない、いわゆる中世の自由民によって構成されていた。』織田信長 石山本願寺合戦前史 著者武田鏡村 より抜粋転載。

宗教を背景に統一的な思想統制のとれた一種の自治都市である。初期の寺内町として注目されるのは、当時「山科御坊」とよばれていた山科本願寺である。山科本願寺は、文明10年(1478)正月、本願寺八代門主蓮如によって建立が始まり、河内門徒が吉野に入って、柱を50本調達するなど、多くの門徒達の協力を得て建てられた寺院である。山科には、諸国から門徒が参集し、旅館などが出来、やがて職人などが集まってきた。このようにして形成された寺内町は、蓮如が吉崎(越前)へ移動した後も自治都市として、独自の発展を遂げている。

山科本願寺の構造は、以後の寺内町形成に大きな影響を与えており、その例として石山本願寺があげられる。

石山本願寺 石山本願寺は、明応5年(1496)蓮如が「摂州東成郡生玉之庄大坂」の地に坊舎を築いたことに始まる。創建当時は、蓮如の隠居地であったのではないかとされている。ところが、天文元年(1532)6月24日、一向一揆を恐れた細川春元に焼きつけられた法華宗徒や近江の六角氏によって、山科本願寺と寺内町が焼き討ちに会う。

当時第10代門主証如が一揆の指揮をとるため大坂御坊に入っていたことから、山科を捨てて、本願寺をここ大坂の地に移したとされている。

大坂御坊は、淀川と大和川とが合流する大阪湾の最奥部、上町台地に位置し、御坊の創建を蓮如がこの地に定めた時分は、「虎狼のスミカ」とまでいわれたように、荒れ果てた土地だったが、眼下には古くからの要港・渡辺津があり、交通の要衝であった。

山科本願寺が法華宗徒や六角氏に攻められた経緯を持つ彼らは「加賀の城作り」を呼び寄せて石山本願寺を建立した。

寺内町の周囲に堀や土塁を巡らせ、町外に通じる出入り口は、潜り戸をともなった堅牢な門で守り、また、警戒・攻撃用の「櫓」を発達させている。

本願寺第11代門主願如は、この石山本願寺を拠点として、全国の門徒を糾合し、元亀元年(1570)から天正8年(1580)までの10年におよぶ信長との対立を繰り広げた。石山本願寺は、願如の息子で本願寺第12代教如が最後まで抗戦の構えを見せたが、天正8年8月、遂に退出することになったが、その際本願寺で失火が起り、消滅してしまった。このように石山本願寺は、戦国時代の一大拠点として絶大な勢力を誇っていた。

石山本願寺の規模はどれほどのものであったのであろうか。織田信長 石山本願寺合戦全史の著者武田鏡村氏は、国立民族博物館研究報告・水藤 真氏・・・からとして引用されている。

「石山御堂、当時門徒約四万人余籠城」四万人が生活できる空間を有していたことがわかる。

石山寺内町には、鍛冶屋・太刀屋・墨屋・桶屋・竹屋・油屋・医師・薬屋・土器師・大工・仏具師・御厨などの職人たちとその家族さらに生活必需品を扱う商人や、遠くは越後・加賀・越前などと交易する商人や運輸業者がいたようである。寺内町に住む人々は、武力を持つ領主の寺内介入を排除する守護不入の特権や、徳政令を免除できる特権、諸役免除の特権などの寺内権によって保護されていたようである。奈良・摂津・河内・和泉の今なおその面影を残す寺内町を列記すると今井町(奈良)、久宝寺(八尾)、招提(枚方)、貝塚、富田林、小浜(宝塚)、塚口などで、これらの寺内町は前記の様々な特権を与えられて開いたのではなく、寺を中心に町が造られ、その繁栄振りを見て、朝廷、貴族、領主が特権を与えたもので、本願寺は細川春元ら有力大名をはじめ、青蓮院門脈や前関白近衛前久らに接触、また、彼らも本願寺に援助を求めるという関係にあった。また公卿を通じて天皇に接近、財力がないため即位式が出来なかった天皇のために献金することで本願寺は門脈に列している。願如が17歳の永禄2年(1559)12月、この献金によって即位したのが正親天皇である。願如との10年戦争の真実、著者武田範村氏。

信長も本願寺に矢銭を課し、本願寺はこの要求に応じている。また久宝寺、招提、小浜の寺内町も信長の要求に応じ、難を逃れている。しかし信長は本願寺を攻撃10年戦争の火種を造った。その大きな理由は、本願寺を屈伏退去させることで、各大名と結ぶ門徒勢力を弱める。本願寺の求心力を失った各地の門徒勢力は霧散する。など戦略的展望に立ち、本願寺にしつこく退去を迫った。また、信長公記には「西は滄海濶々として、日本の地は申すに及ばず唐土・高麗・南蛮の舟、海上に出入り、五畿七道ここに集まり、売買利潤、富貴の羨なり」とアジア、南蛮に通じる要所で、大坂は日本一の境地と認識しており 主の領地には勿体無い、と言うのが信長の考えだったようだ。ここで明確にしておきたいのはややもすれば寺町との混同であるが寺町は、京都、大阪は秀吉が、尼崎は戸田氏が戦略的に各宗派の寺を集めてできた寺町で寺内町とはまったく異なる。

木曜班 市内散策雑記帳

木曜班でこれまで続けてきた寺内町めぐり、一段落で前記を亀井さんに書いてもらいました。市内を改めて散策しようと言うことでその1回目を12月4日郷町・三軒寺界隈を中心に実施、十数名の班員が、ワイワイガヤガヤ。カリオンの下に集まり有岡城跡からスタート、日頃余り暇にしない陰の部分の散策。句碑・歌碑・墓・・・ これまで門を閉ざして近寄りにくかった本泉寺。今は門開放で大歓迎の感。中に入ると、立派な本堂、東隣のアイホールのガラス壁に全景を映し本堂が2つある感じ。墨染寺あたりでは、それにしても女郎塚跡に何もないことを再確認した感じ。三軒寺入り口工事中で入りたいのに入れない所があったり、寺経営の幼稚園からはピチピチの幼児ギャルの声、おおくすの木の間きなれた話と意外な人の意外な話。私は他用のためここで失礼。新旧交流の有意義な散策であった。

2回目は1月22日猪名野神社から緑道・辻の碑・教善寺・・・とうりなれた道、バードウォッチングよろしく双眼鏡を手に瓦や軒下をチェック。緑道の下にカモカワ井の存在をご存知かな昆陽井同様大事な開墾井。今も水利権・・・よく聞く話、そう言えば緑道の所々に木の蓋した所あるよね。教善寺では菩薩の由来。魔寺の火災の時預ったまま取りに来なかったのでそのまま預っているとか・・・伴林光平の隠れ部屋のこと、本尊安置の天井絵のこと、この寺は地の人々の寄付や奉仕での存在大とか、院主の留守に奥方の滑らかな話に時を忘れて聞き入ってしまった。気さくな奥方に感謝、わずかな謝礼で丁度いい時間で失礼を・・・

MG 記

屋外研修 源氏物語の舞台「須磨」散策を実施して 金曜 G 田中 實

平成 20 年 10 月 28 日、青空の下、会員 23 人の参加を得て、標題の屋外研修を実施しました。伊丹、辻の碑から 10 里の昔の国境・関跡の探訪は、山崎、堺、に続いて三回目です。

当日、午前中は「須磨歴史倶楽部」ガイド小林さんの案内で村上帝社→須磨の関跡・関守稻荷神社→現光寺→平重衡捕らわれの松跡→須磨寺→須磨離宮公園を訪れました。当初、ガイドの予定は 2 時間でしたが、小林さんの熱のこもった説明で 3 時間近くのガイドになりました。

須磨離宮公園内で昼食後、各自で一時間ほど同公園を散策しました。好天に恵まれ、自然を満喫できたのではないのでしょうか。その後、松風村雨堂に立ち寄り一同帰路につきました。

須磨は古来より、虚実織り交ぜて、数々の物語、和歌、俳句などの文学作品や謡曲（能）、舞などの舞台となってきました。そこで今回訪れたいくつかのポイントについて地元で語り継がれている伝承を紹介しておきます。

○ 須磨の関跡（関守稻荷神社内）須磨の関は平安末期の歌人源兼昌が「淡路島 かよう千鳥のなく声に 幾夜寝覚めぬ 須磨の関守」と詠み、清少納言が枕草子で「関は逢坂、須磨」と書いたことでつとに有名です。大宝元年（701）の大宝令で攝津に海関が設けられ、これが須磨の関とされてきました。現在は関守稻荷神社境内に兵庫県が「史跡須磨関屋跡」の標識を建てています。また同敷地に明治初年に現光寺裏から出土した「川東左右関屋跡」の標石が移設されています。須磨の関は延暦 7 年（787）に廃止され、正確な場所は定かでないようです。

従って辻の碑が建てられた頃はすでに関跡であったかもしれません。

○ 現光寺（源光寺） 浄土真宗本願寺派の末寺で、永世 12 年（1515）に開基されました。

門前に「源氏寺」の大きな石碑があり、裏面に源氏物語須磨の巻きの一節が刻まれ、さらに小さい文字で「光源氏が京より移り住んで、わび住まいしたところと古来語り継がれている」と彫られています。当然、光源氏は創作上の人物で実在していません。そのモデルといわれた左大臣、源高明が安和の変でこの地に流されたと伝えられていることから、このようないい伝えが生まれたようです。元禄元年（1688）芭蕉がこの寺の「風月庵」に泊まり「見渡せば ながむれば 須磨の秋」の句を作り、明治時代、正岡子規が「読みさして 月も出るなり 須磨の巻き」の句を残しています。

○ 謡曲（能楽）史跡 須磨にはたくさんの謡曲の史跡があり、今回も「松風」「絃上」「敦盛」「須磨源氏」等の舞台を訪れました。このうち「松風」と「絃上（村上帝社）」の伝承を紹介しておきます。

松風の舞台 松風村雨堂 平安時代、在原行平が天皇の怒りに触れ須磨に流され、3 年間わび住まいをしました。そんな時、多井畑の姉妹「もしほ、こぶし」の姉妹に出会い「松風、村雨」と名付けて愛します。行平は 3 年が過ぎ都へ帰る時、ひそかに烏帽子と狩衣を松の枝に掛けて、立ち去ります。姉妹はたいそう悲しみ、行平の住まい跡に庵を建て観世音菩薩を祀り、行平を偲んだといひます。地元では行平が都へ帰るときに「立ち分かれ いなばの山の 峰に生ふる 待つとし聞かば いまかえりこむ」と詠んだとしています。国文学史上では行平が因幡国守に赴任する時に詠んだとしています。

絃上の舞台 村上帝社・琵琶塚 平安末期、琵琶の達人、太政大臣藤原師長が唐へ渡り、琵琶の奥義を極めるため須磨まできましたが、その夜村上天皇の霊が現れ、師長を琵琶の達人としたので入唐せず琵琶を埋めて帰京しました。この伝説から村上帝が祀られています。

最後に伊丹生まれ伊丹三樹彦氏の句碑 くらやみに なおも花散る 平家琵琶（須磨寺）

① 駄六川

乏しい水流に花びらが流れ
水草に吸い寄せられたが離れた
ガチガチに固められ 表情を失い
乾いた土を蘇らせる水はなかった
風は花びらを追って行く

雲正橋から駄六川橋まで
片や 福知山線路
片や 工場跡に出現した 大型商業施設
町の東部を流れ 神津大橋の手前で猪名川に合流する
この小さな川の名を尋ねると
江戸時代に辿り着いた

鴻池のほとりで濁り酒を造っていた山中家
慶長5年(1600)澄み酒の醸造に成功
馬の背に二樽振り分け 江戸に運び大評判となり
巨万の富を得る

「清酒発祥の地 伊丹」の名を高めた
後に山中家は大阪に出て 鴻池家を興し
天下の両替商として知られるが
基は酒造で得た財力だった

この駄送りが伊丹酒の江戸積みが始まり
酒樽二樽を一駄と数え 一樽は片馬と呼んだ
酒樽を数えるのに「駄」という単位を使い

江戸で 酒の値段や運賃なども十駄(二十樽)を
基準とした

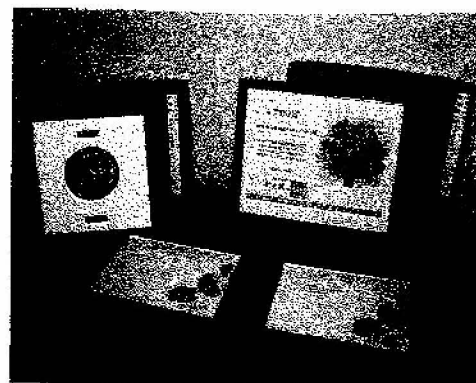
かつての荒木村重の城下町は
寛文元年(1661)大半が近衛家の所領となり
江戸積酒造業の伊丹郷町と発展したが
海に面しないため 輸送は馬で神崎へ
そこから天道船で 伝法(大阪)へ
後は樽廻船で江戸へ運んだ
神崎まで船で送りたい
長い歳月と多くの出願人の夢が
天明4年(1784)に叶う

雲正坂下に 船着場を設け
高瀬舟に十二樽積み
猪名川に出て 神埼へ百艘が往来した
川は いつしか駄六川と呼ばれ
あたりを湊町と言い 料亭や置屋で賑わった

往時の繁栄も色あせて
香気の薄れた町
酒蔵跡の空間は
集合住宅が埋め
虫籠窓をみおろしていた



駄六川



伊丹市文化財ボランティアの会
兵庫県くすのき賞受賞

- ② 台柿 品種は「菊平」と呼ばれへたの周囲が丸く
盛り上がって菊の花びらのように見える渋柿
である

天は背伸びして

たわわに実った台柿は

枯山水の庭にはまりこんで

時を見つめていた

江戸時代後期 頼山陽 田能村竹田ら学者や

画家の一行は 箕面の紅葉狩の帰り 江戸で

「丹醃」と回文にも歌われた伊丹を訪れ

銘酒「剣菱」の醸造元坂上家で酒宴となる

この席に出された台柿のあまりのおいしさに

頼山陽は「もう一つ」と所望したが 岡田家の

庭にある 台柿と呼ぶ珍しい柿で「もうない」と

いわれた その時の想いが「柿記」として 漢詩

と画が残され「頼山陽遺愛の柿」と知られる

柿渋を抜くと甘柿以上に甘くなる渋柿

日々の暮らしが 自然と向きあってきた伝承が

日溜りをつくっていた

鹿兒島の温泉場

湯に浸けて上から竹で押え 10日ばかり置く
母

貴い物で少しだったのか米櫃に入れていた

妻の実家（鳴門）

瓶（かめ）に湯をいれ 柿を浸けて上に藁を

置き蓋をして 10日ばかり待つ

伊丹の柿名所 西野 新田中野

名家に大きな柿の木があった干柿にもしたが

あわせ柿といって一遍湯に通した

渋がとれると甘くなり長持ちして正月がすん

でも甘い

荒牧

へたに焼酎を浸けて紙袋に包みビニール袋に

入れ密閉 2週間ばかり置く

インターネット

コップに入れた焼酎（200cc位）にへた

を5秒位浸けてビニール袋に入れ 終ると

残った焼酎を全て袋の中に入れ 袋の口を開

じて輪ゴムでとめる 日の当る場所なら4日

から5日 日陰なら10日位寝かせる

台柿

もぎ取って置くと自然に熟する 日数はもぎ

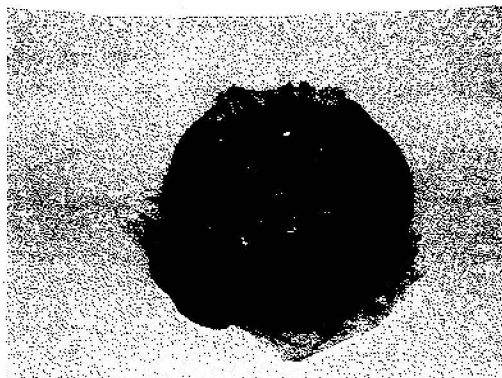
取った時の具合で異なる

風が落葉を追いたてる頃

真赤に熟した台柿は

旧岡田家住宅にある

柿藪文庫の役台箱の前に鎮座していた



頼 山陽の愛した台柿

7月の屋外研修は、木曜グループの案内で開催されました。

去る7月22日（火）は連日のうだる様な暑さの真っ最中。しかも暦の上での『大暑』の日でした。24名の参加を得て、大阪府貝塚市の名刹 水間寺へと向かいました。

容赦なく照りつける陽を浴び、噴きだす汗を拭いつつ到着。

厄除聖観音菩薩を本尊に祀る重厚な本堂、三重の塔などを拝観したあと、裏山にある水間公園に行き昼食を執りました。

一面に緑の芝が広がり手入れの行き届いた広場を眼にしてフジの木陰で、思い思いに弁当を広げました。

その時、「みなさーん、暑いので食塩を持ってきたから、取って回してねー」と女性の声、ふり返ると発声主は、木曜グループのリーダー酒井かつえさんです。

我が文化財ボランティアの会のメンバーは後期高齢者か若しくはそれに近い年齢者が多いのです。参加者の他力と健康を慮って家から食塩を準備してくれたのでしょうか。

帰ってきた食卓塩を手の平に載せ口にしました。暖かみのある深い味が舌に沁みました。酒井さんの他人を思いやる人情、やさしい心遣いに心からの感謝をしつつ食事を終えました。

あと、予定の寺内町の見学を終え、お陰様で全員無事に帰路につきました。

当日の研修は、心温まる意義深い一日でありました。

川柳

乾みのり

株価にも釣瓶落としがあったとは

さりげなくネクタイ変えて違いにゆく

熱燗の好きな君待つおでん鍋

筆跡の乱れが話す恋みれん

煩惱を消す海峡の大落暉

（平成二十年兵庫県川柳祭県議会議員賞）

主な活動記録と今後の活動予定

<ガイド日程・団体・人数>

月	日(曜日)	コース	依頼者	人数
8	22(金)	岡田・石橋家	西宮満池谷町歩こう会	15
	30(土)	A	小田歩こう会テクテク	17
9	20(土)	C	昆陽自治会	47
	24(水)	岡田・石橋家	西宮甲東公民館	29
10	5(日)	岡田・石橋家	満池新田会所	35
	9(木)	A	宝塚やまびこ友の会	35
	15(水)	岡田家	尼崎北小学校PTA	9
	21(火)	岡田家	稲野自治会	27
		郷町館	兵庫県高齢者放送(尼)	30
	25(土)	A	職員ふれあいセンター	50
		F	職員ふれあいセンター	50
	30(木)	岡田家	仏山市(國際平和課)	6
11	1(土)	D	伊丹スワンクラブ	12
	2(日)	F	瑞穂地区社協	80
	8(木)	岡田家	尼崎健康増進すみれ会	51
	11(火)	A	猪名川町中央公民館	42
	12(水)	A	西宮市友会	47
	19(水)	岡田家	三四夢会	15
	22(土)	A	ユニコン(尼崎)	6
12	5(金)	A	Selfまち組	20
	18(火)	B	(尼)いつでもloupe	9
1	9(金)	A	三田市(個人)	2
2	20(金)	郷町一緑丘	自然総研	30
	26(木)	A	スワンクラブ	15
	27(金)	岡田家他	(大阪)住民大学講座	80
3	8(日)	岡田・石橋家	新在家まちづくり委員会	40

編集後記

№39 発行時に急遽心筋梗塞での入院で皆さんには多大の迷惑・ご心配をおかけいたしました。今号合併号にしました。イベント多い時期にしては原稿集まらず苦勞もそこそこ。体調も徐々に復帰しておりますので又よろしく・・・

MG

幹事会 8/4 9/2 10/7 11/4 12/2 1/6

定例会 8/11 9/9 1/14 11/11 12/9 1/15

研究発表 9/9 古代瓦粘土・レプリカ作成

10/14伊丹とボエム

12/8 古代国家の仏教と行基誕生から修行時代

火曜会通信 8/1 №38、2/1 №39・40合併号

屋外研修 9/30 土日版 大阪狭山市

10/28 金曜班 神戸須磨

秋季バス研修旅行 11/11 県立考古博物館・鶴林寺

どんぐり座 9/12 定例会 新作披露

8/20 わくわく教室 中央公民館

11/8・9ロマン事業 きららホール

わくわく教室 8/20

タイアップ事業 8/23 講演会『古代寺院と地域社会』

講師 荻田 哲郎氏

9/27 緑道・北村・伊丹鹿寺跡散策

摂津音頭体験・考古学的体験

ロマン事業 展示 11/8～13 きららH

体験学習 11/1・15、12/8、1/10・24 スカバ

史跡巡り 11/15

講座『発掘から見る神津の歴史』

11/17～21 5回

文化財清掃 11/29

伊丹鹿寺跡・有岡城跡・御蔵塚古墳

行基研 10/20 竹林寺・暗がり峠

ボランティア祭り 10/12 展示

あいたい兵庫ディスティネーションキャンペーン

プレキャンペーン 10～11月

第5回いたみアピールフォーラム 11/29 スワンH

「平成いたみ八景」

県くすのき賞受賞 11/30

しめ縄作り 12/20 西伊丹幼稚園

12/25 会員および一般

文化財ボランティア養成講座 1/27～3/3

3/20 史跡巡り

ロマン事業 体験学習 2/21(土俵)

3/7(木俵)